

東京医科歯科大学医学部卒業

土浦協同病院副院長兼外科部長 東京医科歯科大学臨床教授

伊東 浩次 (高校35期)

迷わず行けよ、行けば分かるさ

在校生の皆さん、はじめまして

私は高校35期卒業の伊東といいます。おそらく皆さんの親御さんより上の年代である私の寄稿が皆さんの高校生活の参考になるとは思えませんが、少しお付き合いいただければ幸甚です。

私の高校時代はまだ学校群制度があり、立川高校は国立高校と72群を形成しており、どちらに振り分けられるか分からず受験した世代です。立高はご存じの通り府立2中から始まり、多摩地区ではもっとも古い伝統をもち、私の高校時代には質実剛健、バンカラなイメージが強かった印象があります。東大にも毎年20-30人程度の合格者を出し、私も立高に入学できたことが人生の大きなターニングポイントのひとつであったと思っています。在校生の皆さんもこうした伝統ある立高の生徒だという自負をまず持ってください。

私は立高を卒業後、1年間浪人した後、東京医科歯科大医学部に入学しました。卒業後はそのまま大学の外科に入局し、東京都がん検診センターや九段坂病院、大久保病院、土浦協同病院、東京医科歯科大付属病院などをローテートし、2009年より現在の茨城県の土浦協同病院で、主に肝臓、胆道、膵臓の外科の手術に携わっております。当院は医科歯科大では最大の関連病院のひとつで、医師250名、看護師900名、800床のベッドを有しており、医師のほとんどが医科歯科大から派遣されております。肝胆膵領域の癌は難治で全ての癌の中で一番予後不良であり、さらに手術は高難度、長時間手術が当たり前の分野です。手術だけではなかなか根治が得られず、化学療法、放射線療法、遺伝子治療などを併用しながら治療の当たる必要があります。また手術も以前からの開腹手術に加え、腹腔鏡手術、ロボット支援下手術と次々に新しい手技が求められます。私は今50代後半となりましたが、今だに新たな知見や手技の習得を続けています(続けようと努力しています)。その歳になって、大変だなと思われるかもしれませんが、まだまだ道半ば、発展途上であると思っています。

仕事以外では私は2つのことを長い間続けています。ひとつは週末のジョギングです。土、日に10kmずつ走っています。外科医は頭だけでなく体力勝負でもありますから。10kmを1時間かけてゆっくり走っていますが、体の健康のみならず、精神的にもリフレッシュできていいことだと思っています。もう一つは毎日ラジオのビジネス英語を聞くことです。これも20年以上続けています(今でもセンター試験の英語なら9割くらい取れますよ)。また少なくとも医師は英語くらいできて当たり前なのかもしれません。学会発表や論文も半分は英語です。学会発表といえば、私は所属している学会が15くらいありますが、全国各地で開催されるため、国内の各県はほとんど出張で訪れています(大分県と鳥取県だけ行ったことがありません)。若い頃は国際学会にも参加して、海外での発表も毎年していました。英語を少しずつでも続けているおかげで、国際会議もあまりアレルギーはありません。(出張旅行も医師や研究者の特権のひとつかもしれません。)ジョギングも英語学習もたいした事ではありませんが、継続は力なりです。

医師を目指したいと考えている立高生へ

私が医師を目指したきっかけは、高校3年の時の担任の先生から勧められたことです。もともとは医科歯科大の歯学部希望でした。医師になろうと思ったのは、人の役に立ちたいとか患者を助けたいとか、はじめはそんな高尚な考えからではありません。

また医師の仕事は皆さんが思っている以上に多岐にわたっています。外科や内科、小児科など全身を診る科もあれば、眼科や耳鼻科、整形外科など身体の一部の領域に特化した科もあります。さらに法医学、遺伝学、感染症科、放射線科など医師もさまざまです。また医系技官のような官僚になる人、保健所のような公衆衛生にたずさわる人などもあります。人を診るばかりが医師ではないのです。医師に向いているかどうかなんて誰にも分らない。大事なことは責任感を持って、最後まで自分の仕事を貫けるかどうか。その上で外科系であればチーム医療なので協調性などが求められますし、人とのコミュニケーションが苦手であれば、研究の道もあります。介護などに興味があれば在宅医療に進むのも一つです。医師といっても多種多様で、とても懐の深い分野だと考えています

また、医師になるのに何も一流大学ばかり行く必要はありません。私もそれほど裕福な家庭の出身ではありませんでしたので、国立大学の医学部しか選択肢はありませんでしたが、地方の国立大学の医学部を卒業しても都内の大学を卒業しても同じことです。地方の大学の中には地域優先枠という入試制度もあり、卒業後その地域で一定期間（多くは9年）、医師として働けば、学生時代には奨学金も付与される制度です（医師不足地域が医師を獲得するための制度で、通常は卒業後地域に一定期間働けば、奨学金の返還義務もありません）。多くは各県内の高校生を対象にしているのですが、他県から受験可能な場合もありますので医師を目指す立高生がいれば検討してみてもいいかでしょう。

最後に大学受験について

皆さんより二世帯も前の私の言うことなどあまり参考にはならないかもしれませんが、私の子供達にも常々アドバイスしていたことです

勉強で大切なことは一冊の参考書をやりきることです。あれこれ食い散らかすのではなく、いわゆる名著といわれる参考書を何度も読むことが大切だと思います。私の高校時代は、例えば数学であれば研数書院の“大学への数学”という名著がありましたが、解法を暗記するくらい、繰り返し熟読していました。英語は語学ですので、毎日少しずつでも文章に触れることです。リスニングでも長文読解でも。物理は浪人時代の駿台で習った微積を使った解法で、目が開けた感じですが、微積を学んだ後ならこれもいいかもしれません。

以上、長々とまとまりのない話を書きましたが、医師という職業に多少でも興味を持っていただけたら幸いです。医学部受験は他の学部と違い大学入学と同時に職業を選択することになりますので、少しハードルが高いと思うかもしれませんが、先に記載した通りいろいろな分野がありますので、誰でも適性のある分野が見つかると思います。“迷わず行けよ。行けば分かるさ”です。

高校から大学の時期は、その後の一生を決める一番大切な時期であるということをしっかり認識して学業に取り組んでください。